

一六
世紀 墓碑初現形態と村落構造の地域差

同志社大 竹 田 聰 洲

村落社会の性格や構造は時に墓の存在形態の上に鮮かに投影される。墓そのものは村の生活に不可欠であるから、古い村では仏教が入る以前から存在したことは自明であるが、村の墓制史にとつて最も一般的かつ最も顕著な画期のメルクマールとなるのは石碑墓の出現である。在地（フィールド）の文献・伝承・景観など総合的な資料条件如何によつては、遡史的分析を介して、該村落に墓碑が始めて出現し、後世の惣村入会墓の原核が

形成された当時の実態をある程度追跡的に復元しうる。石碑は墓の歴史的形態であり、その初現は村の墓制史の史前と史後との分岐点であるが、我々が試みた一・二の実態調査によれば、その初現は一六世紀（戦国期）、村の個戸が石碑をもつようになるのは一九世紀（近世後期もしくは近代）以後であつて、その以前は共有もしくは共用であつた。その所有もしくは使用の共同は、村の構造において同族の比重が大きいか、講組の比重が大きいかによつて著差があつたが、それは石塔個々の容姿のみならず、村内におけるその存在形態の上にしばしば鮮かに反映するといふよりも、むしろ逆に、追跡復元しえた初現期の石碑の存在形態から、同族的な村と講組的な村との類型差は、一六世紀中葉の畿内（東大和）及びその周辺（口丹波）にすでに徴しうるのではないかと考えられる。

（丹波）

（現京北町）

同族村の一例：京都府北桑田郡山国村大字中江・大字比賀江

集落としての現大字はそのまま中世の禁裡領山国庄（柚）に遡る。山村である。中世以来山国庄傘下の各「村」は数姓の名主家とその「同名衆」・「被官」を根幹としたが、「名」（みよ）の同族的経営は中世もすでに早くから崩れていた。しかし中近世を通じ旧名主仲間を中心に強固な惣庄官座を持続した。墓碑の初現は永正（一五〇四）・享祿（一五三六）。比賀江では一個の惣村入会墓として、中江では、村内に散在する名主持庵に名主家墓が憑着する形で出発し、のち持庵陶次の結果

最有力な名家単独の持庵即持墓と惣入会墓とに分化。しかし初期には、石碑造立は名家のみに行われ、惣村入会といつても諸名家の個人墓の共存地として初現し、之が名主同族団の共同詣墓の意味をもつた。次述大和の如き庶民共同碑はここでは終始皆無に近し。

(現都^{つげ}福村)

講組村の一例：奈良県山辺郡都介野村大字吐山^{はやま}

(現状の講組的構造は県教委刊都介野綜合文化調査報告(昭26)所収蒲生正男氏の作業に詳し)。中世の吐山庄。地侍吐山氏の根拠地。近代の大字は七つの「垣内」^{かいと}村から成る。「垣内」は村内の下位地縁でなく、それ自体が一つの村である。江戸時代には垣内毎に庄屋以下の三役を出し、夫々が両墓制と会所寺の所持主体。石碑の初現は天文(一五三二)。永祿(一五五八)。地侍吐山氏の持寺では天文以降連続して個人碑を造立。各垣内では永祿中一斉に各一基の庚申講碑・念仏講碑として出現、爾後近世まで垣内の共同墓碑であつた。